

# 日本民家園だより

vol.64

特集

日本民家園40周年記念(1)

『日本民家園叢書6 日本民家園草創期の記憶』

『日本民家園叢書7 日本民家園草創期の記憶2』

### 【日本民家園草創期の記憶】

日本民家園には現在 25 件の古民家等が移築されています。それらの移築に際しては厳密な調査を行い、建てられてからどの様な変遷を経て現在に至っているのかを明らかにします。そしてどの様な根拠を元にどの様に復原したのかを記録した修理工事報告書を作成します。これは市立図書館や県立図書館に架蔵されています。また移築されてから現在までにどの様な維持管理をしてきたのかも、当時の書類が全て日本民家園に残っているので、それらを見れば分かります。

しかし、全ての事柄が報告書や書類に記録される訳ではありません。そこで当園では、昭和 44 年 6 月から日本民家園に赴任され、以降の移築修理・維持修理に携われた野呂瀬正男さんに当時のお話を伺い、それを冊子にまとめて刊行致しました。『日本民家園草創期の記憶』では旧三澤家・旧工藤家について、『同 2』では沖永良部島の高倉・蚕山山祠堂・旧山下家住宅について、それぞれお話を伺っています。今回はその中から、幾つかのエピソードをご紹介しますと思います。

### 【旧三澤家住宅（昭和 44 年解体・47 年復原）】

三澤家住宅は長野県伊那市の街道沿いにあった町屋で、19 世紀中期の建設と推定されます。

三澤家は当園では唯一の石置き板葺きの屋根です。この屋根板は岐阜の高山の職人さんに作ってもらいました。復原工事の際はそれを葺くのも高山の職人さんをお願いしましたが、以降の屋根葺き替えでは板の作成のみをお願いし、葺くのはこちらの業者でやっています。

この板は全て手で割って作っています。機械で製材した板だと面が平らなので、それを葺くと板同士がぴったりくっついてしまい、そこに毛細管現象が起きてかえって水が吸い上げられてしまうのです。それに対し手割りの板は面がでこぼこしているため板同士の間に隙間が多く出来て、毛細管現象が起きません。また木の繊維を切断していないので、この点でも水が染み込みにくいのです。

この為手割りの板を使うのですが、割る手間賃は板の長さによって大きく異なります。伊那市にあった時は 3 尺（約 90cm）の板を使っていたのですが、当園では経費削減の意味から 2 尺（約 60cm）の板を使っています。また伊那市にあった時は屋根板に栗の木を使っていたのですが、当時は一時的に栗の入手が困難になっていたため、移築した時はサワラの木で代用しました。

三澤家ではこの屋根板の修理が数年ごとに行われて

います。昭和 51 年、55 年、61 年、平成 4 年、7 年、10 年、13～17 年に葺き替えが行われました。平成 7 年の修理頃から再び栗が入手出来る様になり、順次屋根板を栗に替えていきました。現在は屋根板はほぼ全て栗に変わっています。

### 【旧工藤家住宅（昭和 44 年解体、46 年復原）】

工藤家住宅は岩手県紫波郡紫波町にあった家で、18 世紀中期の建設と推定されています。平面が L 字形の「南部の曲屋」と呼ばれるタイプの家で、最初から曲屋として建てられた家の中では現存最古の物と考えられています（後の改造で曲屋となった家の中には工藤家より古い家もあります）。

解体は昭和 44 年の 11 月に行われました。調査をしても、寒さで鉛筆を持つ手がかじかんでしまったそうです。

この時の解体調査では写真撮影にガラス乾板を使用しました。記録用には 35mm 等の小さいフィルムではなく、大きなフィルムを使いますが、大きいフィルムを寒い所で長時間露光すると、寒さでフィルムが縮んでしまい、画像がぼけてしまうのです。その点ガラス乾板には縮む心配が無く、屋根裏の様な長時間露光せざるを得ない暗い場所でも画像がぼやける事がないのです。

復原は昭和 46 年に行われました。一般的に日本の民家の壁や屋根の下地は竹で作られますが、寒冷地では竹をあまり使わない傾向があります。工藤家も現地にあった時は木で壁下地を作っていました。しかし、細い木を大量に入手するにはかなり費用がかかるため、復原では竹で壁下地を作りました。

### 【沖永良部島の高倉（昭和 44 年解体、45 年復原）】

この高倉は鹿児島県沖永良部島の山田中安氏が所有していた物で、19 世紀後期と推定されています。

川崎市には沖縄出身の方が多く住んでおり、日本民家園ではそれらの方々のためにも沖縄の物件を是非欲しいと考えていました。しかし当時の沖縄はアメリカ統治下にあり手が出せなかったため、その代わりに沖永良部島から高倉を移築したそうです。解体は現地の方をお願いし、その部材を奄美大島まで小舟で運び、更に当時奄美大島から運航していた砂糖を運ぶ汽船に載せてもらって静岡県の清水港まで運んでもらい、そこからトラックで日本民家園まで運びました。

高倉は園内の「関東の村」に復原されました。他に敷地が無く、また一応八丈島にも高倉があり、つまり東京にも高倉が無い訳ではないから、という事でここ

に建てられたそうです。現地では台風対策として高倉を含む住居の敷地を珊瑚の石垣で囲っています。日本民家園では珊瑚の代わりに神奈川県真鶴町産の真鶴石まなづるを使ってこの石垣を再現しました。

竣工後の昭和54年に柱上部のトタン製鼠返しを取り替えました。移築時から既に錆びてボロボロになっていた為です。屋根の修理は昭和54年の補修、昭和59年の葺き替え、平成6年の上葺き部分の葺き替え、平成15年の葺き替え、と現在までに都合4度行われています。

日本民家園に移築した時は神奈川県の屋根葺師の方が屋根を葺いたため、屋根の頂上も神奈川のやり方で押さえていました。しかし現地では茅葺屋根を籠状に編んだ竹で押さえていて、これが南西諸島の民家の特徴になっています。そこで平成6年の上葺き替えの際に沖永良部島に視察に行って、これを再現しました。

その後平成15年にキクイムシの被害に遭い、屋根の構造材が折れてしまい、屋根全体が南西に傾いてしまう事態が起きました。そのため茅を全て取り去り、折れた部材を取り替えて再び茅を葺きました。

#### [蚕影山祠堂（昭和45年移築復原）]

これは川崎市麻生区岡上の東光院の境内にあった、養蚕の神を祀ったお堂です。外側の覆堂ふくどうは元治2年（1865）頃、内部の宮殿くうてんは文久3年（1863）に建てられました。

宮殿は当初のままの状態でしたが、外側の覆堂は大正末～昭和初年頃に屋根を改造していました。しかし当初の姿の根拠となる痕跡や写真等はなく、そのため土地のお年寄りから改造以前の屋根の姿を伺って、その話を元に復原しました。

覆堂ふくどうは日本民家園に移築した時に屋根の茅と茅の間にビニールシートを入れてみました。その方が長持ちするかも知れないと考えての事だったのですが、通気性が悪くなり、かえって屋根の寿命を縮める事になってしまいました。移築7年後の昭和51年に最初の葺き替えがなされ、その後昭和60年に葺き替え、平成7年に上葺き部分のみの葺き替えが行われています。

昭和63年に日本民家園の神奈川の村に新たに旧岩澤家住宅が移築される事になりました。しかし移築するための十分な敷地が無かったため、蚕影山祠堂を移動させてその敷地を確保する事になりました。この様に、建物を建った状態で動かす工事を「曳屋ひきや」と言います。日本民家園ではこの蚕影山祠堂覆堂と、後述する野原家住宅で行われました。

#### [旧山下家住宅（昭和44～45年解体、45～46年復原）]

山下家住宅はもともとは岐阜県白川村にあった合掌造りの家で、18世紀末の建築と推定されています。その後昭和33年に川崎市の仙台屋社長千葉健三氏がこの住宅をもらい受け、これを使って川崎区小川町に郷土料理のレストラン「白川の郷」を開店しました。しかし移築して3～4年後に2階奥の客室から出火して屋根裏の大部分と1階の一部を焼損してしまいました。直ちに修復され営業は再開されましたが、千葉氏は事業の転換を図ることとし、日本民家園に旧山下家の移築保存を依頼されました。

白川郷から移築する際、千葉氏は礎石から柱・梁まで全て川崎に運んでおり、また厨房や便所等の新設部分は全て外側に付設していて、間仕切りの変更等はありませんでしたが、基本的には白川郷にあった当初の姿をよく留めていました。そのため専門家からも日本民家園に移築するに相応しいとお墨付きが出て、昭和45年に解体、翌昭和46年に復原されました。

しかし、この家の移築は民家園の当初計画には無かったので、適当な敷地がありませんでした。そこで既に移築されていた野原家住宅を曳屋して、敷地を確保しました。また敷地の関係上、本来の位置とは違う所に出入口を設けています。

山下家は日本民家園に移築した時は三橋得二氏を代表とする伊勢原の屋根葺師が屋根を葺きました。これ以前の江向家住宅の移築の際に、五箇山ごかやまに行って現地のやり方を覚えてもらって葺いてもらっており、山下家でもそれを踏襲していました。山下家はその後昭和57年に全面葺き替えをしています。この時も伊勢原の職人さんが同じ方法で葺いています。しかし、同じ合掌造りでも、江向家のあった富山県五箇山地方と、山下家のあった岐阜県白川郷とでは屋根の形に違いがある事が後に分かりました。そこで、平成8年の全面葺き替えの際には白川郷から屋根葺師を呼び、白川郷のやり方で屋根を葺いてもらいました。現在日本民家園で見られる屋根がその時の物です。

#### [おわりに]

日本民家園は今年で開園40周年を迎えます。従って当園に移築して以降の出来事も建物の歴史の一部になっています。それを再検証する意味から、今回の様な関係者への聞き取りや旧所有者の方々への聞き取り等を今後とも当園では続けて行きたいと考えています。

（安田徹也）

背景写真：旧工藤家住宅 移築前の土間（昭和42年9月14日）  
煙草の葉を吊して乾燥させている。

# 旧三澤家住宅の解体から現在までの様子



解体の様子(昭和44年)



解体の様子(昭和44年)



解体終了後の敷地(昭和44年)



日本民家園に復原された時(昭和46年)



三澤家前での崖崩れ(昭和51年)



屋根修理の様子(昭和61年)



屋根修理の様子(平成15年)



門の瓦屋根葺き替えの様子(平成15年)